

第Ⅳ章 まとめ

旧石器時代について 本遺跡では角錐状石器、ナイフ形石器、スクレイパー、台形石器を中心とした石器群が確認された。第Ⅲ章の植物珪酸体分析の結果から、この石器群はAT層と小林降下軽石層の間に形成されたものと位置づけられる。また、Ⅶ層を中心としてⅥ層とⅧ層の遺物が接合すること、Ⅶ層で礫群が検出されていること等から、これらの石器群は同一の文化層である可能性が高い。この文化層は、製品群の組成から概ね宮崎10段階編年（宮崎県石器文化談話会2005）の第6段階に相当するといえよう。

本遺跡で出土した接合資料には、原石から自然面除去を行い、素材剥片あるいは石核を作出し持ち出す工程（接合資料④・⑤）と、小型の石核から目的剥片を剥離する工程（接合資料①・②）の二種類がみられる。また敲石は、大きく欠損しているものを除くと重量2000gを越える大型のものから100g前後の小型のものまで出土している。これらの遺物は、秋成雅博が定義する一次的な石器製作（移動を前提とした石核・素材剥片の製作）と二次的な石器製作（製品の製作）の両方が本遺跡で行われていたことを示唆するものといえよう（秋成2014）。

縄文時代早期について 本遺跡では無文土器を主体として、前平式、下剥峰式、楕円押型文土器が出土した。無文土器は縄文時代早期の宮崎平野部で一定の出土量がみられる一群である。器形と器面調整の特徴から、綿貫俊一編年（2008）の第6段階（陽弓式）に相当するものであろう。また楕円押型文土器は器壁が薄く文様は小ぶりであり、押型文土器の中でも古相、山下大輔の第1段階Ⅰ類（山下2009）に位置づけられる。したがって、綿貫の編年観に基づけば、本遺跡の土器群は無文土器の第6段階のうち、押型文土器の古相を含む段階を主体とするものと評価できる。また、本遺跡で確認された打製石斧未製品の接合資料は、他の遺跡での報告例は多くなく貴重な事例といえる。集石遺構や炉穴は検出されなかったが、出土遺物からは本遺跡周辺で石器製作や狩猟・採集に関わる人間活動が行われたことが推測される。

参考文献

- 秋成雅博 2014「宮崎県の遺跡群」『九州旧石器』第18号 九州旧石器文化研究会
- 山下大輔 2009「南九州の押型文土器に関する一考察」『南の縄文・地域文化論考 新東晃一代表還暦記念論文集』南九州縄文通信No.20 南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会
- 綿貫俊一 2008「西南日本の無文土器」『総覧 縄文土器』小林達雄先生古希記念企画 株式会社アム・プロモーション
- 宮崎県旧石器文化談話会 2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66 旧石器文化談話会
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『南学原第1遺跡 南学原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第50集
- 2002『下屋敷遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第56集